

〈論 説〉

「死首の咲顔」における一考察

——「死首」の意味するもの——

中 田 妙 葉

—

『春雨物語』の稿本として上げられるのは、「春雨草子」、天理冊子本、文化五年本、富岡本、天理卷子本の五種類である。これらの五種は生成過程については、様々な意見があり、最終稿について結論が出ていない。その内、現在唯一の完全本が、巻末に「文化五年春三月」の年記がある文化五年本である。そして、「死首の咲顔」という題名がつけられて収録されているのも、この文化五年本のみである。天理卷子本には、「死首の咲顔」の末尾部分だろうという断片が残ってはいるが、その断片には「死首の咲顔」という題名がついているわけではない、内容から考えて、「死首の咲顔」の結末のところであると思われる。

(前欠) へにて空しく成りたりと人告たれと、一族たれもく、にくしとて、問もゆかす。五藏法師は、父なれば舟のたよりもとめて行。死からたもとめて、又、舟にのせて庵にかへり、是も冢ならへてつきたれと、宗

か墓は改装といふ事して、すこし隔て祭りたつ。よろつに心ゆきて行ふ。かの親か鬼也とて、人皆いふ。いな、おやに似ぬは、五僧法師こそ鬼子なれとて、鬼律師と名よひしとそ、かたりつたへたりけり。

それに対し、文化五年本の「死首の咲顔」は、次のように結ばれている。

五曹はやかて髪そりて法しとなり、この山の寺に入て、いみしき大とこの名とりたり。元助は、母をたすけて、播磨のそうの方へしりそきて、鋤秋（鋤）とりて、むかしに同し。母も機たて、たくはた千、姫の神に似たり。曾次かつまは、おやの里へかへりて、これも尼となりしとそ。妹か首のゑみたるま、にありしこそ、いとたけく（し）けれど、人皆かたりつたへたり。

森田喜郎氏は、天理卷子本の断片の内容と、その断片に題名が未提示という状況を踏まえ、天理卷子本に修められている断片は「いな、おやに似ぬは、五僧法師こそ鬼子なれとて、鬼律師と名よひしとそ、かたりつたへたりけり」の箇所が、五蔵の賛美で結ばれているとし、文化五年本の結びは、「妹か首のゑみたるま、にありしこそ、いとたけく（し）けれど、人皆かたりつたへたり。」と、宗の賛美で終わっていることに注目し、「両者を比較してみるとわかるように、その結びが前者は五蔵、後者は宗となっていることから、天理卷子本は内容がよほど異なっていたものと思われる。文化五年本はその結末から「死首の咲顔」という篇名にふさわしいものになっているが、もしかしたら、天理卷子本は五蔵に即した篇名になっていたのかもしれない。」<sup>(1)</sup>と、文章の推敲のみならず、執筆意図の変化まであったと指摘している。これは、大変特筆すべき意見だと思われる。

確かに、「死首の咲顔」が同題材としているのが源太騒動であり、その源太騒動の顛末に基づき執筆した「ますらを物語」では、「死首の咲顔」の五蔵と同じ立場である右近の登場がほとんどなく、その人物像が全く見えてこない。

対して、「死首の咲顔」は五蔵に沿って話が展開していくといってもよいほど、彼の人物形象は際立っている。自らの考えを持ち、自らの考えに即して行動する人物として描かれているのである。それ故、五蔵像の読み方も様々であるが、このことから、森田氏の「五蔵に即した篇名になっていたのかもしれない」という意見は、大変説得力をもつのである。森山重雄氏は、篇名を変えたとまでは言わないものの、五蔵の人物形象の豊かさに注目する。

ただ「ますらを物語」で明瞭に書かれていないのは右内である。右内は弟姫や団次を通じて間接的にしか書かれておらず、この事件に対して、どう処したかあいまいなのである。おそらく、そのことが一つの重要な動機となつて、「死首のゑがほ」が、改めて書かれることになるが、この時、秋成は実説から大きく離れ、右内（五蔵）中心の物語を新しく創造することになる。それはもはや実際にあつた源太騒動の右内ではない。新しく創造された秋成的青年の像である。<sup>2)</sup>

五蔵の人物像については、賛否両論意見の分かれるところではあり、どちらかというと優柔不断の矛盾した人物として、評価はあまり高くない。しかしながら、森山氏はそれらの意見を踏まえ、異なる角度から見たとき、次のように豊富な人物像として五蔵を捉えている。

この五蔵像を、矛盾に満ちた前後撞着したものと考えるか、それとも暗示的な沈黙を蔵した深い心の持主としてみるかで、評価がわかれてくる。わたしは「死首のゑがほ」の価値は、五蔵像の創造にあるとみるものであって、この一見優柔不断にみえる五蔵の弱さこそ、近世文学に稀にみる複雑な心情を表現していると考えた。周囲の誰をも不幸にしまいという五蔵の配慮が、遂に悲劇を招来するという典型的な例がここにある。わたしはかつて、『雨月物語』の勝四郎とか豊雄は、運命が外から襲ってくるもので、それを甘受しているにすぎないのに、五蔵は運命を自分の中に集中してしまっ、自分の行動を縛ってしまうという、一段と高められた人間になっていると述べたことがある。豊雄や勝四郎らは、自分の悪を知っていないけれど、五蔵は自分の悪を意識している。自分のみが善で、五曾次が悪だという観念はないのである。五蔵は地平線的に理解しうる部分と、理解を絶した沈黙の部分秘めた人間として描かれている。こうして弟姫中心の「ますらを物語」は、五蔵中心の「死首のゑがほ」として改作された。この五蔵像は、豊雄や勝四郎に萌芽していたものの一層の深化である。こういう五蔵像を創造した「死首のゑがほ」は、「ますらを物語」の「二番煎じ」ではありえないし、また「大衆の再び甘い恋愛小説」でもない。<sup>(3)</sup>

この森山氏の「五蔵の弱さこそ、近世文学に稀にみる複雑な心境を表現している」という指摘は、大変傾聴すべき意見である。五蔵は社会規範の「孝」と、あだ心の「情」の間で大きく揺れている。「周囲の誰をも不幸にしまいという」配慮が、彼を「優柔不断にみ」せるのである。五蔵は森山氏が指摘するように「秋成的青年の像」であり、「社会的規範」と「あだ心」の間で常に揺れていた、秋成自身に他ならない。『痲癩談 下』に、この道理に対する記述がある。

其のことわりをおしいただきても、そのをしへのままにおこなふ人はあらぬげなり。あるじも、これがたぐひなるべし。よしやなすもなさぬも、われさかしおろかのみにはあらで、かしこき人も、世におしたてられては、おこなへど猶かひなきものか。

道理を大切に行おうとしても無理であり、それは賢さとは関係ないものであり、無理にさせようとしても効果がないと述べている。秋成が如何に実社会で道理を遂行しようとする頑張り、悩んだかと言うことがわかる。彼のため息が聞こえてきそうである。「孝」を尽くそうと努力はするものの、最終的にはやはり「あだ心」であろうと「情」を選ぶという五蔵の選択は、秋成の価値観を表現したにすぎない。

秋成には、人は銘々の生業にいそむべきであつて、それに従う精神が「まめ心」であり、反対に学問や芸術に従う精神は「あだ心」であり、「まめ心」を脅かすと考えていたらしい。五蔵の父五曾次は、その「父に似す、うまれつき宮こ人」の五蔵が「手書、詩や文このみ習」うことについて、不満をもっており、五蔵に書物は福の神が嫌うので、処分するようにと忠告する。

おのれか部屋には、書物とかいふものたかくつみ、夜は油火か、けて、無やくのついえする。是も福の神はきらひたまふと云ふ。反古買には損すへし。もとの商人よひて価とれ。親の知らぬ事しりて何かする

書物を福の神が嫌うため、書を好む者は福の神から嫌われるということを、秋成は『癩癩談 上』で、述べている。

書をよむは、貧をまねくためなり。とあながちにいはれけり。螢の火かけ。雪のひかり。隣の壁のこぼれをたのむたくひ。おほかりけり。みやこに。浪華に。書籍あまた買ひつみて。もたりといふ人も。こがね千ひらを つひやせし人は。いと稀なりとや。

五蔵が「あだ心」を体現化した人物であるとすれば、五曾次は「まめ心」を体現化した人物である。五曾次は右記したように、貧を招かないために、五蔵に書を処分するよう、厳しく言いつけている。また、確かに『蛇性の姪』の豊雄は、自らの手で真女子を退治したことから、彼の「まめ心」が「あだ心」を排斥したという見方をする事は理解できる。しかし、秋成が「まめ心」のために、「あだ心」を排斥する対象と考<sup>(4)</sup>えていたかという点、それには疑問が残る。なぜなら、「まめ心」があることから「あだ心」を表現することができるのである。反対もしかりである。この二つの心は非なるものであることから、互い互いの様相を映し出す。五蔵と五曾次も同じである。自分が何者であるかを自覚するためには一人ではできない。自分を映し出す、陰となるもの陽となるものが、必要である。五曾次はまさしく、五蔵を映し出す鏡の役割をしているのである。

## 二

前述したように、『春雨物語』の五種の稿本のうち、「死首の咲顔」が収められているものは、文化五年本、天理卷子本の二種であり、そのどちらが最終稿であるかについては、まだ検討途中である。もし、「ますらを物語」↓「死首の咲顔」（文化五年本）↓天理卷子本であるならば、「ますらを物語」の弟姫を受けて、宗に注目した話が書き表され、その後五蔵を中心にした話に展開されていったと推測できる。しかしもし、成立過程が、「ますらを物

語」↓天理卷子本↓「死首の咲顔」(文化五年本)ということになると、「ますらを物語」では唯一「明瞭に書かれていない」右近に「複雑な心情を表現」した五蔵を中心人物においた話しに作りかえられたものの、さらに宗に注目する話になるということは、弟姫の立場から話を展開することに立ち返ることになる。つまり、成立過程が変わることで、「死首の咲顔」の執筆意図の変化にも大きく関わってくることになる。そう考えるとき、木越治氏の言う「ますらを物語」から「死首の咲顔」への改稿の様相を検討することが、「死首の咲顔」の執筆意図を考察するには重要だという説く意味が理解できるのである。

一方、「死首の咲顔」は、天理卷子本に末尾部分の断片が残るのを除けば、文化五年三月の奥書を持つ『春雨物語』に収められているのが唯一のテキストである。

このことは『春雨物語』の改稿過程を考えるうえで重要な意味を持つ。特に、従来の富岡本・天理卷子本最終稿説に疑問が出され、文化五年本最終稿説が提起されている現段階にあって、「ますらを物語」「死首の咲顔」という組み合わせは、成立時期を確定しうるテキスト同士であってしかも比較が可能な唯一の例ということになるからである。それゆえ、「ますらを物語」から「死首の咲顔」への改稿の様相を検討することは、そのまま文化五年本の執筆意図が那邊にあったかを考えることにつながる。そして、その方向性をどこまで押し広げていけるかによって、文化五年本最終稿説の是非は内在的に決定できるはずである。「ますらを物語」を「秋成集中の傑作であるばかりでなく日本文学中の絶品」(佐藤春夫)と評することは簡単であるが、そうした評価をいくらくりかえしても、それを捨てて「大衆小説的気味があり」「二番煎じのあじきなさ」しか感じ取れない「死首の咲顔」になぜ代えたのか、というきわめて素朴な問いに答えることさえできないのである。<sup>5)</sup>

「ますらを物語」は、文化三年四月十七日、徳川家康の命日にあわせて京部近郊の乗寺村円光寺で催された東照宮祭の宴席で出会った渡辺源太翁の人柄に触発されて書かれたものである。残る二種のテキストは、ともに文化四年には成立していたとみられる。

「ますらを物語」の導人箇所には、その執筆理由が書き記されている。「まさし事」を伝えていない都賀庭鐘の『西山物語』は「よき人をあやまついたつら文」であるから、「まさし事」を伝えようと筆を執つたとある。

西山物語と云ふもの、なまさかし人の作りなしたりしは、かへりてよき人をあやまついたつら文也けり。唐土の演義小説、此国の物かたりふみ、其作りし人のさかし愚にて、世に遺れると、やかての時に跡なく亡ふにいちしるければ、いふもさら也。是もはやくにほろひし数にそ有ける。さて、此のまさし事、おろそけの筆には書と、むましけれど、譎りならぬには、後長くつたへよとそ思ふ。読見ん人、くり言めきたるをおしはかりして、又かたりつけよかし。

渡辺源太翁にあつた感動に推されて、書き進めた作品である。その文章からは、秋成の意気込みが伝わってくるのであるが、なぜ『春雨物語』に収録しなかつたのであるのか？『春雨物語』は「物がたりさまのまねひ」という趣旨でつくりあげたものであるから、「まさし事」を伝えようとした「ますらを物語」は志向が違つたのであるのか。しかしその最後には、「今日、この翁か人に交りて、いと、うらゝかに心よけなるを見れば、そのむかしの有りさま、実にしかこそ有つらめとおもふ給へらるゝ」と確信し、「くはしき事は聞き漏らしつべし。」と思いつつも、書き表した結果「老がたどたどしき筆には、又も謹つけやすらん。さるは、味気なきさかしら事なりけり」

と、締めくくっている。「ますらを物語」も、書き記してみた結果、どうやら「さかしら事」であるという思いに至った感想をもらすのである。この感想と同じ内容が『春雨物語』の序にある。

されと、おのか世の山かつめきたるには、何をかたり出ん。むかし此頃の事ともも、人に欺かれしを、我いつはりとしらて、人をあさむく。よしやよし、寓ことかたりつ、けて、ふみとおしいた、かする人もあれはとて、(富岡本)

ここでも「いつはり」と知らずに「人をあさむく」とあり、「ますらを物語」でも当初「まさし事」を記そうと筆を執りつつ、物語の収束に当たって振り返ると「味気なきさかしら事なりけり」と、漏らした感想と同じであることがわかる。「ますらを物語」が『春雨物語』に収められなかった理由が、「まさし事」を書き記したからという理由ではないことが見て取れる。秋成は、源太騷動から離れて、その話しの骨子を使いつつ、秋成独自の世界を創作したかったと考えるほうが、妥当ではないだろうか。

このような創作方法は、まさしく『雨月物語』の「菊花の約」や「蛇性の姪」が中国白話小説の「範巨卿雞黍死生交」(『古今小説』)や「白娘子永鎮雷峰塔」(『警世通言』)の骨子を使いつつ、自らの世界をその中に落とし込むという手法と同じである。むしろ秋成が得意な表現方法であり、創作方法といえる。源太騷動を記したことによって、話を構成しているある要素に、秋成が触発され筆を執った。その結果、「死首の咲顔」が執筆されたと、考えるべきであろう。

そこで、「死首の咲顔」が「ますらを物語」から大きくかわった部分に注目してみたい。源太騷動という事件の

縛りがあるため「ますらを物語」では表現できない要素に注目したとき、真つ先に思い浮かべられるのは、「ますらを物語」を展開させるための重要人物である弟姫は、「死首の咲顔」の宗に至って、全く別人に仕立てられていることである。彼女は一切の思いを口にするのではなく、五蔵の言うことに素直に従う女性である。弟姫のように自ら死を選ぶことで、右近への想いの強さを表現するようなこともなく、宗はただじつと五蔵が来ることを待ち、五蔵の訪れを喜ぶ。その様子から周囲は宗の五蔵への愛情を感じ入るのである。つまり宗は五蔵に沿ってその存在を周囲に感じさせるような表現をされている。読者はいわば、五蔵や母、兄の目を通して、宗という存在を認識していると言ってもよい。

このように弟姫と宗の愛情表現の違いを比べてみると、まず五蔵中心の話しが記され、弟姫の描写は五蔵に合わせた宗という人物像に変化していたと考える方が自然であるように思われる。勿論五蔵中心の話の表題は「死首の咲顔」ではない。五蔵が物語の核だと分別できるものである。ただ、秋成が何度も手直しをしたといっても、登場人物の名前自体に変化がないことから、表現の細かな書き直し程度で、人物形象への大きな改作はないのではないだろうか。

「ますらを物語」で影の薄かった右近だったからこそ、そこに秋成は自分の創作を織り込ませやすく、筆を加えた。それが「死首の咲顔」の前身の形ではなかっただろうか。つまり、五蔵中心の話しを書き進めている内に何かに詰まり、宗を核とする話に変更した。それ故、後半部分を変えることになった。とすると、「文化五年本」は「天理卷子本」よりも後の作品だということになる。

三

「ますらを物語」の「ますらを」は誰を指すかという議論はさておき、弟姫は思い人の右近の心変わりを疑い、悩み苦しんだ末の決心として、自らの死を選び、母にその許しを請うのである。

度々の御さとし、ほね身にしてみて侍るを、た、おにくしき心の、おもひをもやさせて、死ねとしふるにぞ、胸つふれてうつ、なく侍る、さらは尼に成てんと思へど、親兄の御心にそむきて入へき道にもあらし、あはれ今までの命そとおほしなして、御暇たまはらはや、た、うらみつへきは男の心也。親ゆるしなくは、一たひはいつちにも逃かくれて、出交はる世をまつへきものにいひしは、なくさめかねし偽りか、死は安し、ひたふるに頼みてあれといひしは、きのふの事也、我先死なん、云かひなき人の音つれは待たしとて、深く思さためたるつらつき也。

母は弟姫の様子をみて、決心をかえることはできないと見て取り、兄の源太には、右近方の父の出方を見て、弟姫の行き先の決まりをつけてくるよう言い含める。

此子は物のつきたるぞ、されど、犬ねこさまにてあらんには、後の世をいとほし、かの翁か心は常の事なり、右内こそいふかひなけれ、養ふともすつるとも、いかにもせよかし、つれゆきて、かしこにて事行なへよとて、おほしきためてのたまへり。

この母の言葉は、娘姉姫の死を既に覚悟した言葉であり、それならば「犬猫の様な私通」という畜生道に墮ちたままにせず、人間らしく死なせたいという母の思いがこもっている。そうして姉姫は右近の気持ちを確かめようと、兄の源太と右近の家へ行き、右近の父団次に、右近に会わせてくれるよう頼むが聞き入れられない。団次は「とくいね」と声を荒げて、威丈高に二人を追い払おうとする。右近は「おとつ日の夕暮れに紛れて失ぬ」という状況だという。「今はいかにする」という源太の問いに対し姉姫は、「はた死なんとおほして、いつちしらす出で給ふならむ、かた時もおくれてあらし、御手を給はらすは、ふところの物もていさきよからん」と「こゝにてたゝ今」と、この場で死ぬ願いを申し出る。源太は「其為にこそ、母のつきそひゆけと」言い含められてきたのであるから、団次の許しがなくても「こゝ汚さん」と、姉姫の死の援護する立場を表明する。団次は死を決した姉姫と源太に対し、そうはいつでもする筈がないと高をくくり「いつれの所也とも」と、姉姫と源太の決行する意思の表明に対し、形ばかりとはいえ姉姫が自分の家の仏壇の前で死を遂げることを、団次は承諾したことになる。

このように「ますらを物語」は周到な手順をふんでから、姉姫を斬首することになるので、読者には姉姫の死に納得がいき、その死を決して不自然には感じないのである。この点が「死首の咲顔」で宗の首が突然切られることと、大きく異なる点であるし、それぞれどこか、後世の読者から「ますらを物語」は、死を望みその意志を貫いて死んだ姉姫や、死に導いた源太を「ますらお」であるという評価を受ける一方で、「死首の咲顔」は不可思議な作品であり、「大衆小説的気味があり」「二番煎じのあじきなさ」しか感じ取れない、と思わせる原因を作り出している要因でもある。<sup>(7)</sup>

## 四

更に、もう一つ「死首の咲顔」では削除された要素がある。烈婦は「おみなしからぬもの」つまり、「女の仕合せを知らぬ者」<sup>(8)</sup>であるという考えである。弟姫の死を覚悟している母が、弟姫本人にかける最後の言葉に記されている。出立の朝に、弟姫の母は、悲しい心情をあらわす言葉として、次の言葉で娘弟姫に繰り言を述べる、

女はよき家にめとらるゝとも、又、其家のをしへをいたゝきて、おのか心なる世はなき者也、たま〜義と信との為に刃にふし、くひれなどするを、烈女とて語りつたへしも、おもへ、それ身幸ひなきものゝ、死にせまりたるにて、おみなしからぬものにて是にかそへあけられ、ほまれ有むは、貞操にかへて命をおとし、孝忠にたかふ罪かららず、今かく帰るへからぬ迷ひ路に入たるは、いと苦しからめ、とくゆけとて、涙見せず、奥にゐさり入給ふ。

人倫をはずれ「迷ひ路に入」ってしまっている娘はさぞかし辛いであろうと、貞操のために死ぬ娘の悲しさを、涙を押し殺して述べる母の言葉である。義だの信だので貞操の為に死に、烈婦として褒め称えられ語り伝えられている。思っている、その女性達はその身に幸せが訪れなかった者にすぎなく、女の幸せを知らない女でしかないという。思っている、右近のために死を選んだ弟姫は「貞操にかへて命落」すという烈婦の行為をしようとしているけれども、それはただ「孝忠に違ふ罪」であり、決して軽くない罪だ、とその言葉は厳しい。しかしその裏には、若くして死にゆく娘への深い愛情と悲しみが感じられるのである。

そして、この考え方は秋成自らの考え方のようで、『胆大小心録』や『茶痕醉言（異文）』にも同じような一節がある。

すべて、忠臣、孝子、貞婦とて、名に高きは、必不幸つみく／＼て、節に死するなり。世にあらはれぬは、必幸福の人々なり。

義士烈女の世に名をのこせしを見れば、大かたは不幸の人々なり。

〔茶痕醉言（異文）〕五五

「ますらを物語」には記されていないが、世に名を残す人は必ず不幸な人で、幸福な人というのは世に名を知られないという、いかにも秋成らしい言い回しである。ここで注意したのは、幸福な人は世に名を知られるような事をしないという逆説である。つまり、「ますらを」と称えられている弟姫は、世の中がどんなに称えようと、彼女人自身は少しも幸福ではなく、女としての幸せを知らないままに死んでいった可哀想な女性でしかない、という見解なのである。弟姫の母の嘆きは、秋成本人の弟姫へ対する悲しくやるせない思いを表しているように思われる。世に名を馳せることがなくても、幸福な生活をしていることが何よりも大切なことである。特に女性は烈婦などという冠を被せられることなく、無名で女の幸せを味わえるような生活を送ってほしいという、秋成の願いを感じるのである。

そして、最後に幸せな思いに包まれ、咲顔で亡くなった宗には、母から右記の言葉を投げかけられることはないのである。今にも死にそんな宗を送り出す母は、宗と対面できるのも、これが最後だと思っていたであろう。しか

しその送り出しは至って自然な、母が嫁ぐ娘にかける言葉でしかない。

我もわかきむかしのうれしき、露わすられすそある、かしこにまいりては、た、父のおに／＼しきをよくみ心とれ。母君は必ずよ、いとほしみたまひてんとて、よそほひとりつくるひて、駕にのるまで、万ををしへきこゆ。

「万を教へきこゆ。」というのは、嫁ぐ娘を心配する母として、非常に普通の表現である。宗とそれに付きそう元助が出て行っても「母は門火たきてうれしげ也。」なのである。娘の死に対する心配や悲しみなど微塵も感じられない。だからといって、この時に母が宗の死を覚悟していなかったわけではない。何故なら元助が宗の首を刎ねたことに驚いた庄屋が、元助の母は知らないだろうと息せき切って伝えに行くと、母はいつもの通りに布を織っており、聞いても取り乱した様子はなく、

しかつかうまつりしよ。こゝろえたれはおとろかす、よくこそしらせたまふとて、おり来てみやまひ申。

と冷静に対応したことに、庄屋は更に驚いたとある。宗の母はしっかりと「こゝろえたれは」という一言を口に出している。この一言で、自分の心情を何も口にしないだけでなく、微塵も見せないで、宗の事だけを心配するという気丈に振る舞う母の強さと、宗への深い愛情を感じずにはいられない。では、秋成は「死首の咲顔」では母に何も語らせなかったのであろうか。それは、宗が死んだとしても、その死は弟姫のように貞節を貫いた「一たひたてし

みさをに、玉と砕けても、瓦のまたきに習はし」という思いでの死ではなく、幸せに包まれた死であるということ、母は解っていたということになる。そうであるから、出立の時に「うれしげ」だったという解釈が可能である。

## 五

「ますらを物語」では、物語りの焦点は、やはり「なぜ、兄は妹を殺すことになったのだろうか」ということを中心に、話が展開していることが伺われる。事の発端は、弟姫と右近の密通である。それに気づいた母は弟姫に戒めるが、弟姫の様子を見てると諦めるどころか、その思いを断ち切らせることの難しさを感じる。もし、「強く云へば、淵にや沈まん、木にや下がりなん。」と弟姫が苦悩の内に自殺をすることを心配し、右近の父団次に縁談を申し込んでくるよう兄に申しつける。しかし、心中は団次はその縁談に頓首することはないと思っていたので、母は上の言葉に続けて、「縁談申し入れるとも、彼人がたく赦すまじ。たゞ是が思やりばかりに」と、あくまでも弟姫の意を汲んであげるだけでもしてあげようという行動に出るが、思った通り団次は右近と夫婦になることを取り合わない。団次に拒まれてからは、右近も初めの勢いはどこへやら、一向に姿を見せなくなってしまった。悲しみに暮れた弟姫は思い詰めてしまい、母に死なせてほしいと切望する。その思いを止められないと見た母は、せめて娘の死が犬死にならないように、という一点に考えを向けるのである。そこで、死に場所を団次の家の仏壇という、家のまさしく象徴となるべく場所で、弟姫の嫁ぎたいという悲願にできるだけ近い形で、その思いを遂げさせてあげようとするのである。

ただし、それを強行に行ってしまったのは、それこそ弟姫の我が儘になってしまうので、森田氏がいうように、慎

重に、周到な手順をふみ、団次の許可ももらった上で、弟姫を斬首するのである。弟姫の健気な思いを根底として、右近や団次の源太一家を愚弄する態度、母の娘への深い愛情から導かれる死に際に対する思慮深い見解、そして源太の豪胆な行動という、要素の一つ一つが、どれも読者には、兄が妹弟姫を断腸の思いで斬首した行為に同調させ、その死を決して不自然には感じないように導いているのである。

それに対し、「死首の咲顔」では話しの焦点を、「ますらを物語」と同じようには定めていない。兄が妹を殺さざる得ない理由や経緯を読者に理解させるために、秋成は執筆したわけではないと、筆者は考えている。では、何をもって「死首の咲顔」を執筆したのであろうか。

「ますらを物語」では、母は弟姫の死への切望たる思いを戒めて、烈婦というものは、どんなに世に名を語り伝えられても「女の仕合せを知らぬ者」であると、強く諫めている。しかし、弟姫は母の愛情深い忠告も聞かず、烈婦の道を選び、「女の仕合せを知らぬ者」となってしまった。そこに着目して宗を見てみよう。彼女の死に際に、孝行者で決して親に背かなかった五蔵が、烈火のごとく怒る父に対し、「この女、我つま也。追出さるれば、こゝより手をとりに出んと、兼て思うにたかはさるこのあした也。いさ」と、宗の手を取って出て行こうとするのである。

作品中には宗の不安の言葉は一切書き記されてはいない、しかし、度々床に伏してしまい、今日や明日の命かと思われるほど憔悴しきった状態に対し、読者は自然と宗にとっては五蔵の心がいかばかりかとその不安な思いと、その反対に彼の心を信じたいという思いとの板挟みからくる苦悩、散々思い煩った末の事態なのだろうと、容易に思いつく。その憔悴し切った宗は、やっと五蔵の口から、自分を愛することへの覚悟ともいえる思いを聞くことができ、彼の愛情をしっかりと心に受け止めることができたのである。まさしく「女の仕合せ」に満たされた、究極

の幸せな状態である。そのまま、元助に斬首されたので、彼女の最期は最高に幸せな状態であった。

上述の通り、弟姫も確かに右近の愛情を信じ斬首されたので、その点では「女の仕合わせ」の境地で死に至ったといえる。しかしそれは上述の通り、彼女の早とちりともいえる思い込みであり、本来の状況を知っている読者は、弟姫の死になんとも心地の悪さを禁じ得ないであろう。このように、死に際に立たされた弟姫と宗は、どちらも思い人の愛情を受け止めながら死に向かうのであるが、その境地は全く反対の状態なのである。

このように考えると、秋成は宗が何の不満を言わなくとも、彼女の心は命を削るほど思い詰めていたこと——それは、五蔵の優しさが故に、様々などころに気を遣い、その結果、五蔵の気持ちに宗に分かりにくくなるという状況を作り出していた——を読者が同調できるように、人物形象や状況を創作したことがわかる。宗は何も言わない、しかしながら、彼女の心の不安な情景は、五蔵の行動に対する母や元助の反応で読者は追いかけることができる。さらに、どんなに憔悴していても、五蔵のいうことを素直に聞き、五蔵さえいれば体調は良くなる宗の健気さと愛情深さは、その切なさが読者の心をくすぐるのである。この宗の人物形象は、言葉のないところ、言葉と言葉の空間から行間から、読者に彼女の心情を想像させている。秋成の筆致の極地が表れていると、筆者はみるのである。

## 六

源太騒動において、やゑが斬首されたか否かは、実はあきらかではなく、『百箇条調書』にも『西山物語』にもそうは書かれていない。首が切られたことをはっきり記しているのは、渡邊家につたわる言い伝えを除けば、歌舞伎の『けいせい節用集』と秋成のこの二作品のみである。つまり、秋成はこの源太騒動のプロットに対し、斬首と

いう結末に強い思い入れがあるということがわかるであろう。

森山重雄氏は『西山物語』と「死首のゑがほ」で、斬首の意味について以下のように述べている。

折口信夫によれば、木や水で死ぬのは、血を落さぬ死に方で、禁忌を犯さぬ自殺法だという。「死首のゑがほ」はその逆であり、首を切るというもっとも残酷な、血をあやす方法をえらんでいる。中国の法制史家である仁井田陞によれば、斬首は首と胸とが離れ離れになるから、再生不可能であり、あの世における復活の可能性を奪う方法だという。…(中略)…この論理を「死首のゑがほ」に適応すれば、首を切られた宗の靈魂は、あの世において再生復活することは不可能だということになる。しかし、「死首のゑがほ」の「ゑみ」が、恨みを吞んで死んだのでないとすれば、その「ゑみ」は、あの世における復活再生の代償として設定されたのではないか。「ゑみ」によって死の世界から生の世界へ、満足して死んだ合図を送っているともとれる。<sup>9)</sup>

右記から「ますらを物語」と「死首の咲顔」は、家の和解や、恋愛が主体で相手との一体という主題とはかけ離れた物語であると、森山氏は述べている。

前述したように、「ますらを物語」で弟姫は、右近が失踪したと父団次から告げられた途端に、「はた死なんとおほして、いつちしらす出給ふならむ、かた時もおくれてあらし」と自分の死を決する。彼の失踪は自分との婚姻を許してもらえないことから、死を選んでの行為と思いい、自分も遅れてはいけなさと、右近の死を追いかけようとする。しかし読者には、右近は決して弟姫との愛を貫かんと失踪しわけではないことを感じている。前段での父の叱

責に対して何の表明をしない右近の様子から、結局兄源太が言うように「親大事なりとて、人の子を大ねこ」同然の扱いをしたことになったと、読者は気づいている。弟姫が母に訴えたように、右近が以前彼女へ伝えた、「親ゆるしなくは、一たひはいつちにも逃かくれて、出交はる世をまつへきものにいひしは、なくさめかねし偽」であった。弟姫の読みは正しかったのである。

故に読者は、自分との愛情のために死を決する弟姫のその恋心、その純真さと、現実のギャップを感じながら彼女が死に歩を進めていく様子を見守ることになる。このような状況は、弟姫の死に対してより意味を持たせ、彼女の思いに愛おしさと同情を感じさせられずにはいられなくさせるのである。兄が妹を斬首するという行為は、いくら妹の意志とはいっても、どうしても猟奇的に見えるものである。しかし、この右近の薄情さが対照となつて、より弟姫の情の深さを浮き立たせ、読者は同情と理解をもつて彼女の死を受け入れるようになるのである。秋成の見事な手法といえよう。

何より読者に弟姫の死を受け入れさせるポイントは、彼女は当初母に自らの自決の意志を告げ、許しを請いた時のように、右近の裏切りを責め、恨んで死ぬわけではないところである。死に際には彼の愛情を信じ、彼への愛から死を決したと言うことにある。たとえそれが、勘違いであつたとしてもである。

彼女は、彼への愛を純真に心に抱いて死を結実させた。彼女の心の中は、愛で満たされていたのである。ただ残念なことに、その死に顔は描写されていない。何故なら、「ますらを物語」は、あくまでも源太が妹を斬首した経緯と彼の豪胆振りを綴ることに焦点があつたからである。弟姫の死に対する彼の振るまいが、最もその豪胆振りを描写するタイミングに他ならなかつた。筆者は、この弟姫の死に際の境地や状況が、「死首の咲顔」で秋成が表現したかつた宗の最期に繋がっているとみるのである。

弟姫は思い込みで右近の愛情を感じつつ、自らの命を兄に斬首させた。死を覚悟した心中は、いくら気丈な弟姫であっても、さぞかし恐怖に満ちていたであろう。それに対し、宗は、最愛の五蔵が自らの言葉で、自分を妻だと五曾次へ宣言し、それを聞いた間際、まだ仕合わせに満ち足りていた中で、兄に突然その命を絶たれるのである。心の中は、恐らく仕合わせで充ち満ちていたはずである。

斬首ということは、首が体から切り離される行為である。つまり、体の痛さを頭が感じないということになり、引いていえば表情が変化しないということになる。秋成はその状態を狙ったのではないであろうか。頭が痛さを感じなければ、宗の咲顔はいつまでもそのままである。死に顔が苦痛の表情になることはない。宗はその死に顔に、咲顔を保ったままでいられるのである。愛しい五蔵の脳裏にも、その美しい咲顔のみを焼き付けることになる。これが女性の究極の幸せでなくてなんであろう、と秋成は考えたのではないだろうか。

「ますらを物語」の母が、弟姫の死が無駄死にならないよう、少しでも意味のある死を迎えられるように、その死に際に精一杯の配慮を行った。このことが、秋成に、死に際と、その大切さに注目させた。そして、「死首の咲顔」を執筆させる意欲を起こさせたのではないだろうか。死に際が幸せであれば、どんなにそれまでの生活が苦労続きであっても、幸せな気持ちを抱いて死を結実させられるのではないか。ということは、最高に幸せな気持ちで死を迎えることが、詰まりは究極の幸せなのではないだろうか、と。

では、女性にとって幸せとはなにか。思い人の深い愛情に包まれることが、幸せの一つにあげられるのではないかと考えた。つまり、女性の究極の幸せの一つとして、思い人の愛情を感じつつ深い愛情に包まれ、死を迎えることである。ということを用意図として、創作されたのが「死首の咲顔」ではないかと、筆者は考えるのである。

そして、「死首」とは、一つの女性の究極の幸せの状態を具現化したものであり、女性の最も美しく幸福な表情である咲顔を損なわないで、閉じ込めたものに他ならないのである。まさしく究極の幸福で美しさの表現なのである。しかしながら、「死首」をもって女性の猛々しさも含めた、全体的な美しさを表現しようとした、その秋成の思考を表現するための発想力に、ただただ感服を禁じ得ないのである。

「死首の咲顔」、「ますらを物語」『痲癩談』の原文は、中村幸彦代表編者『上田秋成全集 第八巻』中央公論社、一九九三年によった。

『膽大小心録』（『茶痕醉言（異文）』の原文は、中村幸彦代表編者『上田秋成全集 第九巻』中央公論社、一九九二年によった。

- (1) 森田喜郎『上田秋成の研究』笠間書院、一九七九年、三九八頁。
- (2) 森山重雄「ますらを物語」の成立」（『幻妖の文学 上田秋成』三二書房、一九八二年）二〇九頁。
- (3) 森山重雄「『西山物語』と「死首のゑがほ」」（『幻妖の文学 上田秋成』三二書房、一九八二年）二二三、二三四頁。
- (4) 小林勇「死首のゑがほ」小考』『読本研究』第五輯上套、一九九二年、溪水社刊、三七頁。
- (5) 木越治「俗への意思」——「死首の咲顔」の意味——」（『国語と国文学』第千十四号 平成二十年五月特集号、東京大学国語国文学会、至文堂、二〇〇八年五月）六四頁。
- (6) 森田喜郎『上田秋成』、紀伊国屋書店、一九九四年、一七一頁。
- (7) 拙者「死首の咲顔」クライマックスの不思議」（『東洋法學』第六十二卷第一号、東洋法学会、二〇一八年七月）二二四頁。
- (8) 中村博保校注「ますらを物語」（中村幸彦・高田衛・中村博保校注・訳者『英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』小学館、一九九三年）六二九頁。

(9) 同注(3)、二二七、二二八頁。

— なかた わかば・東洋大学法学部准教授 —